

落合町埋蔵文化財発掘調査報告書

西河由上遺跡

1986.3

落合町教育委員会

序 文

わが落合町は約1万年前から人々が生活してきた所で、その証しに数多くの埋蔵文化財があります。

西河内地区は落合町内でもとりわけ遺跡の多い地域の1つです。

たとえば西河内川中流域右岸の中山丘陵には前方後円墳1基を含み、30基で構成される横部古墳群や、特殊器台、特殊壺を副葬する土壙墓がみつかった中山遺跡などがあり、質的にも立派な埋蔵文化財のある地域です。

この度、西河内上地区において圃場整備事業が行われることになったため、落合町教育委員会では工事に先立って遺物の散布地について確認調査を実施しました。その結果、6世紀末に造られた摺峪4号墳が発見されたことは大変意義のあることと考えられます。

この発掘調査につきましては、岡山県教育委員会をはじめ、関係諸機関、地権者の皆様方には格別のご理解、ご協力を頂き、深甚の謝意を表する次第であります。

またこの作業を担当下さった調査員、炎暑の下で発掘に従事下さいました方々に厚くお礼申し上げます。

昭和61年3月

岡山県落合町教育委員会

教育長 片岡 甲子郎

例 言

1. 本書は落合町教育委員会が昭和60年度国庫補助を受けて実施した「西河内上遺跡」の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は昭和60年5月10日から7月13日まで実施し、落合町教育委員会職員森田友子が担当した。
3. 出土遺物の整理は森 美和の協力を得て森田が行った。なお出土遺物、実測図、写真等については落合町教育委員会において保管している。
4. 本報告書の執筆、編集は森田が行った。
5. 本書に使用したレベル高は任意高である。方位は第2図は真北、他は全て磁北である。
6. 発掘調査は岡山県教育委員会、落合町役場、落合町文化財審議委員、地権者等関係各位より絶大なる援助を受けた。記して謝意を表します。

目 次

I 立地と周辺の遺跡	1
1. 遺跡の立地	1
2. 西河内上遺跡と周辺の遺跡	1
II 調査の経緯	4
1. 調査に至るまで	4
2. 調査体制	4
3. 調査経過	4
III 調査の記録	7
1. A地区の調査	7
2. 摺峪4号墳の調査	8
3. B地区の調査	17
IV まとめ	20
1. 摺峪4号墳について	20
2. 西河内上遺跡について	20
V 付載　ズリ窯跡	23

図 目 次

第1図 落合町位置図	1
第2図 西河内上遺跡とその周辺遺跡 (S=1/10,000)	2
第3図 西河内上遺跡周辺地形図 (S=1/3,000)	3
第4図 西河内上遺跡トレンチ位置図 (S=1/1,000)	6
第5図 A-1トレンチ、出土遺物実測図 (S=1/100、S=1/4)	7
第6図 A-5トレンチ実測図 (S=1/100)	8
第7図 摺峪4号墳墳丘実測図 (S=1/100)	9
第8図 摺峪4号墳周溝断面図 (S=1/100)	10
第9図 摺峪4号墳石室実測図 (S=1/40)	11
第10図 摺峪4号墳遺物出土状況図 (S=1/30)	12
第11図 摺峪4号墳出土遺物実測図1 (S=1/4)	13
第12図 摺峪4号墳出土遺物実測図2 (S=1/4)	14
第13図 摺峪4号墳出土遺物実測図3 (S=1/2)	15

第14図	摺峪4号墳出土遺物実測図4 (S=1/2)	16
第15図	B区トレンチ実測図	18
第16図	B区トレンチ内出土遺物実測図	19
第17図	ズリ窯跡周辺遺跡図	22
第18図	ズリ窯跡採取遺物実測図	24

図 版 目 次

図版 1	(1) 西河内上遺跡遠景 (2) 西河内上遺跡近景
図版 2	(1) A-1 トレンチ (2) A-5 トレンチ
図版 3	(1) A-2 トレンチ内古墳周溝検出状況 (2) A-3 トレンチ周溝、石室検出状況
図版 4	(1) 摺峪4号墳石室内遺物検出状況 (2) 摺峪4号墳石室検出状況
図版 5	(1) 摺峪4号墳玉類検出状況 (2) 摺峪4号墳石室発掘状況
図版 6	(1) 摺峪4号墳全景(東より) (2) 摺峪4号墳全景(西より)
図版 7	(1) 摺峪4号墳周溝土層断面 (2) 摺峪4号墳周溝内遺物出土状況
図版 8	(1) B-1 トレンチ (2) B-2 トレンチ
図版 9	(1)~(8) 摺峪4号墳出土遺物
図版10	(1)~(7) 摺峪4号墳出土遺物 (8) A-1 トレンチ出土遺物
図版11	(1) ズリ窯跡近景 (2) ズリ窯
図版12	(1) B-2、3 トレンチ出土遺物 (2) B-1 トレンチ出土遺物 (3)~(8) ズリ窯跡表採遺物

I 立地と周辺の遺跡

1. 遺跡の立地

落合町は岡山県の中北部に位置し、岡山県の三大河川として知られている旭川の中流域に開けた町である。旭川は中国山地に源を発し、岡山市から瀬戸内海に注ぐ全長約 150kmの川で落合町は河口より約2/3程度逆ったあたりに在り、北に隣接する久世町付近からは川巾も広くなり上流から運ばれた土砂によって沖積地が形成されている。

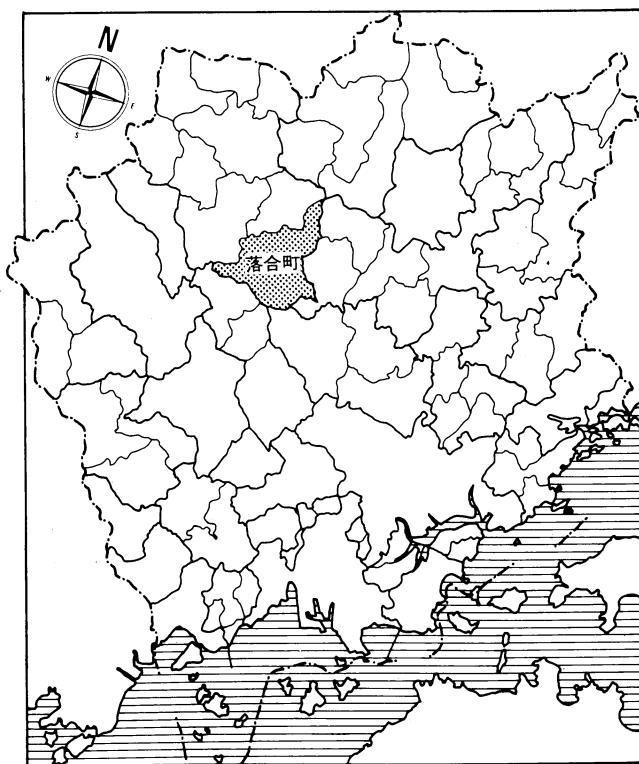
遺跡は落合町の中心部よりやや北に位置し、旭川の支流である備中川の更に支流である西河内川の上流の狭い谷の奥に位置している。

落合町は古代においては美作国、真鳴郡と大庭郡の二つの郡の南端に位置し、文献では和名抄にその名がみられる。和名抄によると遺跡はそのうちの真鳴郡、垂水郷に属する。

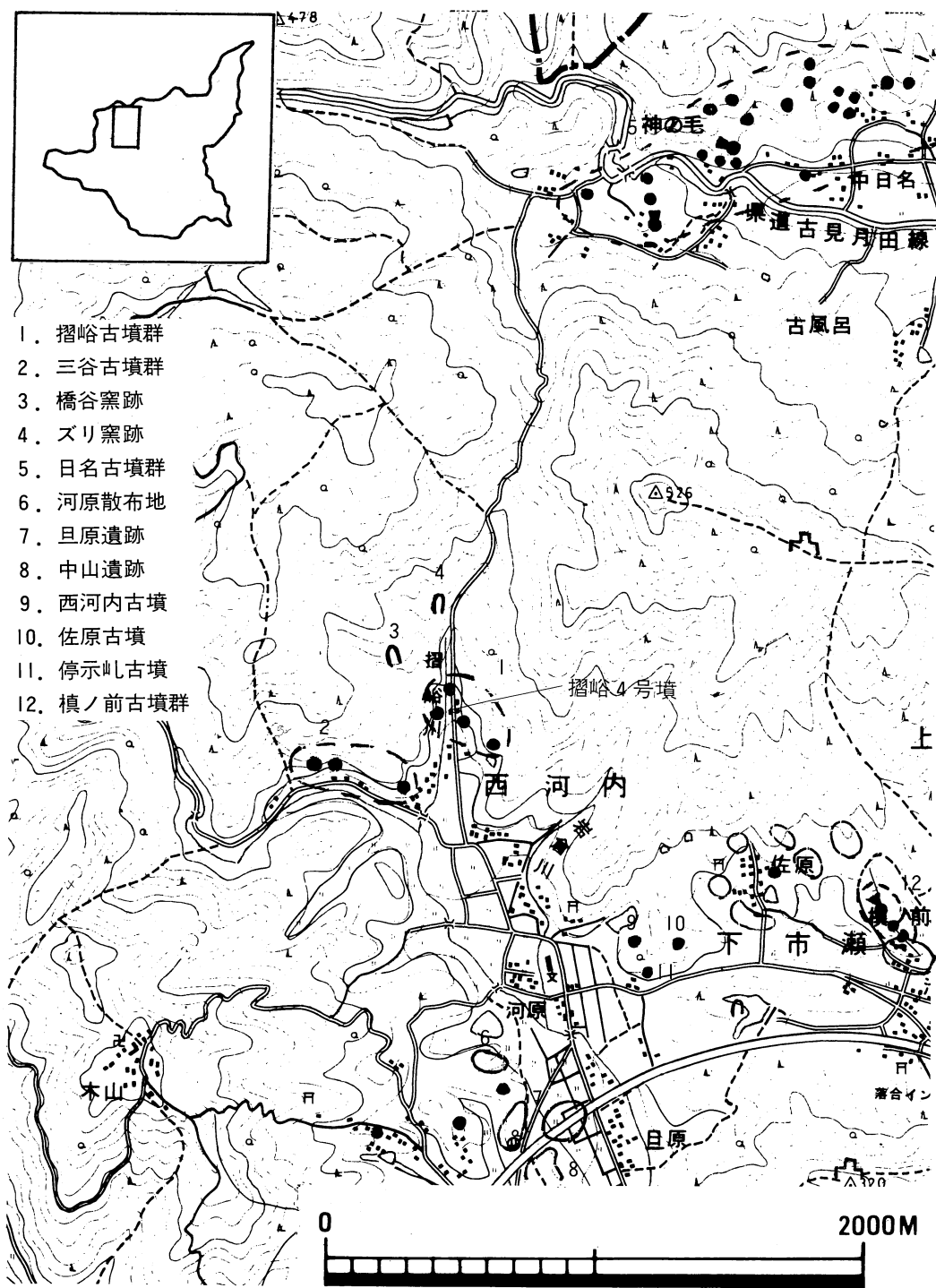
2. 西河内上遺跡と周辺の遺跡

西河内上遺跡の所在する西河内周辺は遺跡の多い地域である。落合町における遺跡の立地状況は、中小の河川によって開けた平地をもつ地域に認められるもので、旭川の支流である当摩川、河内川、備中川流域に多い。

備中川の支流である西河内川流域では当遺跡のある上流域と下流域に遺跡が集中しており、中流域には少い。上流域は西河内川本流の左岸に三谷古墳群、支流の摺塔谷川に沿って摺塔古墳群と、更に谷の奥に奈良時代の須恵器の窯跡が2基存在する。下流域では右岸丘陵上に認められる。弥生時代終末期の集団墓が多数出土した中山遺跡(注1)を始め弥生時代の竪穴住居址、古墳、室町時代の建物跡等が検出された旦原遺跡(注2)や全長31mをはかる前方後円墳を含む横部古墳群などがみられる。

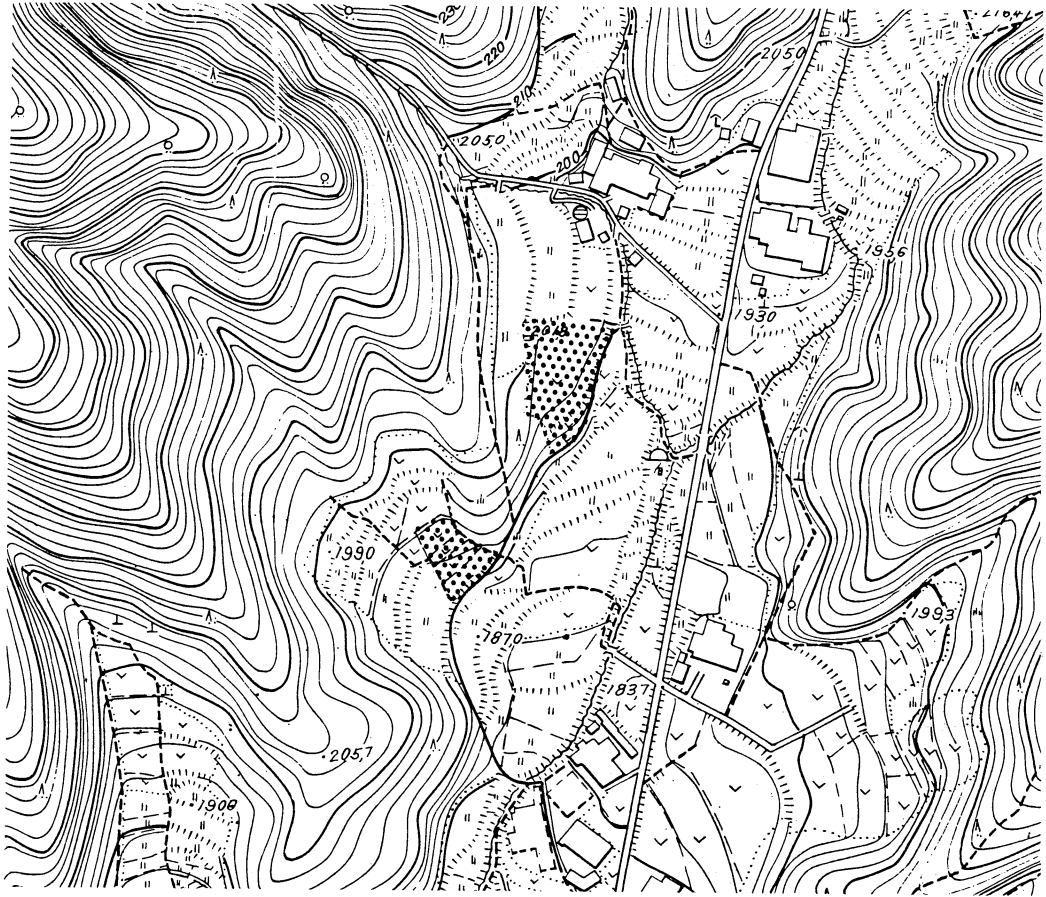


第1図 落合町位置図



1. 摺谷古墳群
2. 三谷古墳群
3. 橋谷窯跡
4. ズリ窯跡
5. 日名古墳群
6. 河原散布地
7. 旦原遺跡
8. 中山遺跡
9. 西河内古墳
10. 佐原古墳
11. 停示峠古墳
12. 槇ノ前古墳群

第2図 西河内上遺跡とその周辺遺跡



第3図 西河内上遺跡周辺地形図 1/3000

東に隣接する市瀬地区は中国縦貫自動車道敷設の際に発掘調査を行って弥生時代の井戸址や平安時代の建物址などが検出された下市瀬遺跡(注3)を始めとして古墳や土器の散布地が多い地域である。

標高 526.1mの深山を挟んで北側に開けた谷は通称日名谷と呼ばれており、杉山から東流して旭川に注ぐ当摩川の両岸の丘陵には多数の古墳が築造されている。それらは日名古墳群と呼ばれ前方後円墳2基を含む34基から構成されており落合町内でも最大の古墳群を形成している。また当摩川の下流右岸には真嶋郡衙の推定地とされている福田遺跡、高屋遺跡がある。(注4) 両遺跡は圃場整備事業に伴い、昭和56年、57年の2ヵ年で発掘調査を実施した結果、郡衙跡と決定しうる遺構は発見されなかったが、弥生時代～奈良時代に至る住居址がみつまっている。

注1 落合町教育委員会「中山遺跡」1978

注2 岡山県教育委員会『旦原遺跡』「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告」11. 1976

注3 岡山県教育委員会『下市瀬遺跡』「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告」3. 1973

注4 落合町教育委員会『福田A遺跡、高屋B遺跡』1983

II 調査の経緯

1. 調査に至るまで

西河内上地区では団体営の圃場整備事業を昭和60年度より実施するということが落合町建設課より落合町教育委員会へ連絡があった。圃場整備計画区域内には周知の遺跡として摺峪2号墳（通称テントリ塚）が1基あるのみであったが、周辺には他にも古墳2基と須恵器の窯跡があることから落合町教育委員会は昭和59年10月2日と10月19日の2日間にわたって分布調査を実施した。その結果、牧草地2ヶ所に土器片の散布する所があるため落合町教育委員会は遺跡であるかどうかの確認及び、もし遺跡であるならばその規模、性格、時期等を明らかにするために確認調査を実施しなければならないという方針を出した。また分布調査の際、摺峪2号墳についても発掘調査経費の積算をした。それをうけて落合町建設課と地元地権者とで話し合いを行った結果、摺峪2号墳の調査は経費の問題から現状保存をするということに決定した。須恵器の散布地2ヶ所については昭和60年度の国庫補助金を受けて落合町教育委員会が確認調査を実施することになった。

2. 調査体制

発掘調査は文化庁より国宝重要文化財等保存整備費補助金を得て落合町教育委員会が実施した。調査体制は次のとおりである。

発掘調査主体	落合町教育委員会	教育長	片岡 甲子郎
		教育課長	上原 勝 吉
事務担当		教育課長補佐	竹田 繁
		主 事	薬師寺康 昌
調査担当		主 事	森田 友 子
調査協力者	村岡矢治郎、山田美代吉、山田すみ、山口房野、山口緑、 国本知子、森美和		

なお、発掘調査及び報告書作成にあたっては下記の方々の御協力並びに御教示を得た。特に村岡太郎宅にはプレハブ事務所を建てさせていただいた他にも多大な協力をお願いした。記して感謝の意を表したい。

村岡太郎、村岡匠、村岡貞子、村岡勝、鶴沢裕美、河本清、松本和男、西本敬一郎

3. 調査経過

発掘調査は調査区が牧草地であるためイタリアンの刈り取り終了後の5月10日より開始し、途中で梅雨期に当たったため全作業を終了したのは7月16日である。

調査はA地区とB地区の2地点に分けて実施しまずA地区から開始した。5月16日なってA

ー2トレンチの溝状遺構より6世紀前半頃と考えられる須恵器片が出土した。これにより溝状遺構は古墳の周溝になる可能性が考えられ、主体部の想定される位置にAー3トレンチを設定した。Aー3トレンチは横穴式石室部分に当り、東へ開口することがわかった。Aー3トレンチの北側には周溝の位置を確認するためにAー4トレンチを設定した。これにより古墳は直径約9mの円墳で6世紀末に築造されたことがわかった。

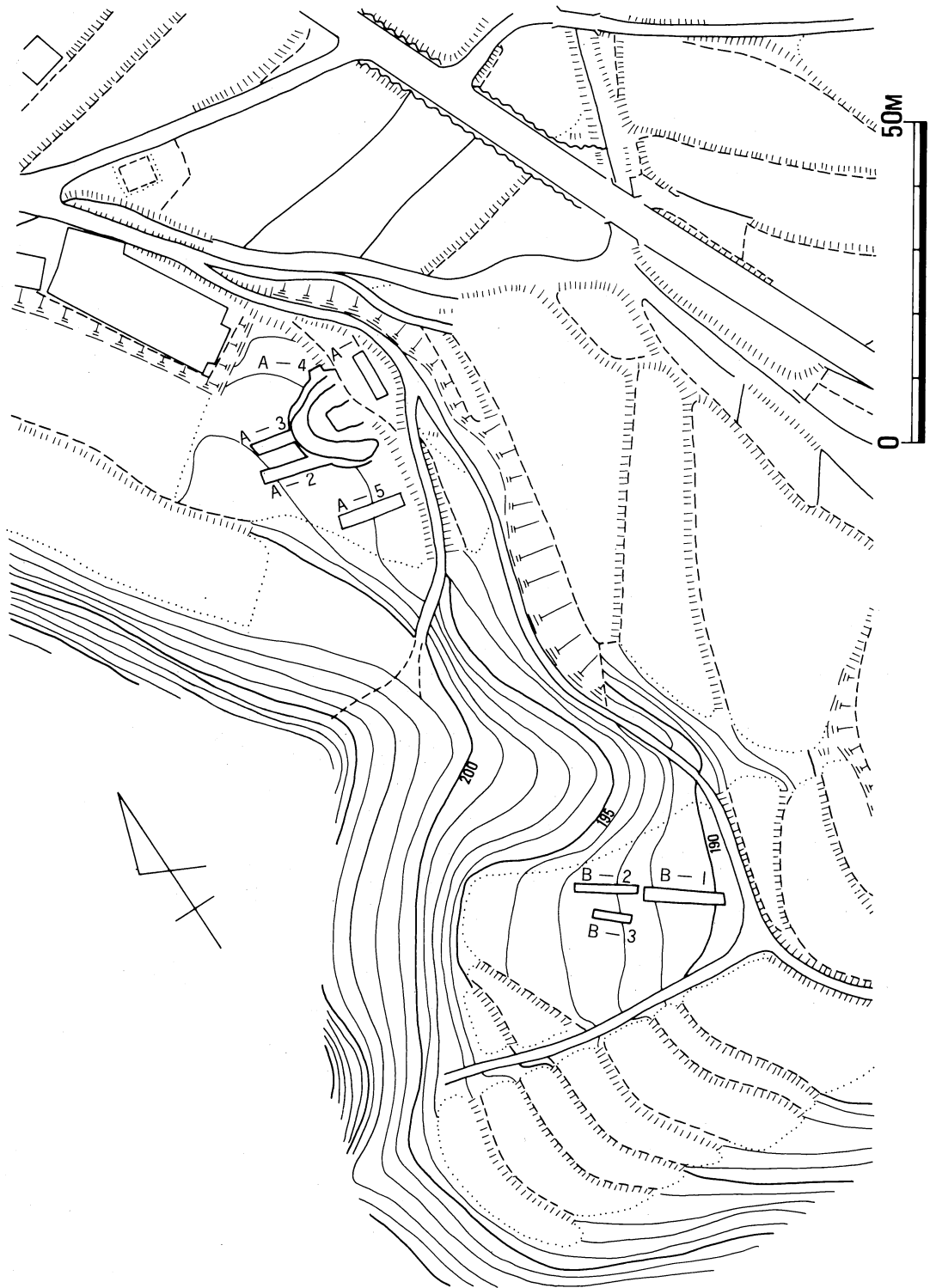
A地区では他に遺構は認められなかったため6月5日よりB地区の調査に入る。B地区は遺構が検出されなかったため6月14日より再びA地区の調査に戻った。6月の後半は雨天の日が多く、作業に支障をきたしたが7月16日には現場での全作業を終了した。

発掘調査面積はA地点ではトレンチ5本、187.78㎡、B地点ではトレンチ3本、38.5㎡の合計226.28㎡である。

なお、発掘調査期間中には地元の小学6年生56名の見学を始め、町内から多数の人が見学に訪れた。また6月16日の日曜日に行った現地説明会には約80名の参加があった。



現地説明会風景



第4図 西河内上遺跡トレンチ位置図

III 調査の記録

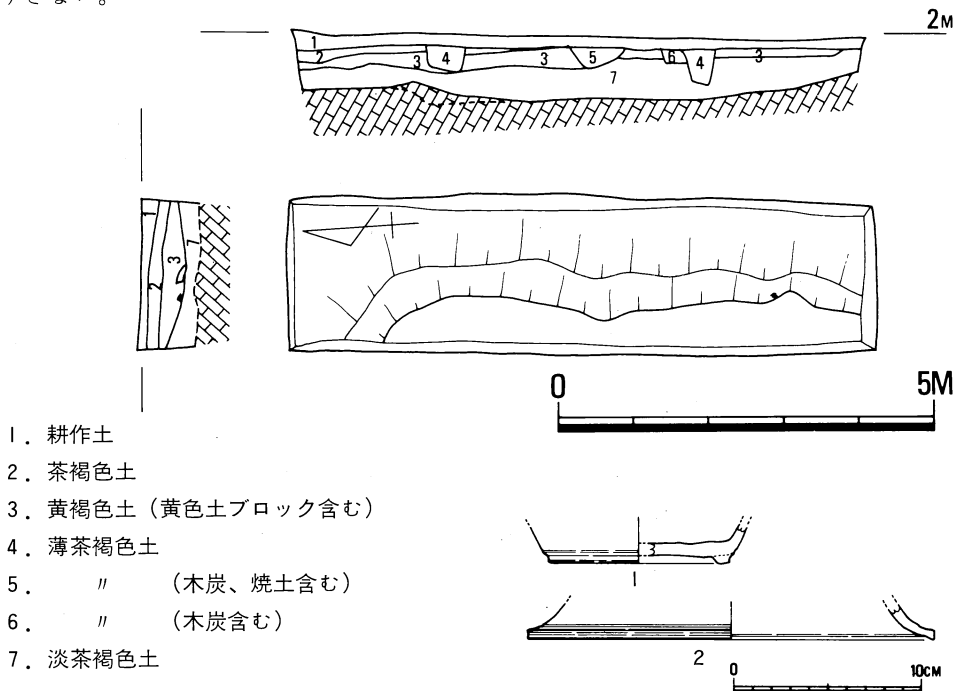
1. A地区の調査

A地区では傾斜に対して平行もしくは直角に5本のトレンチを設定した。そのうちA-2～A-4トレンチについては摺峪4号墳の遺構部分にあたるため頁を改めて説明することにし、ここではA-1トレンチとA-5トレンチについて述べる。

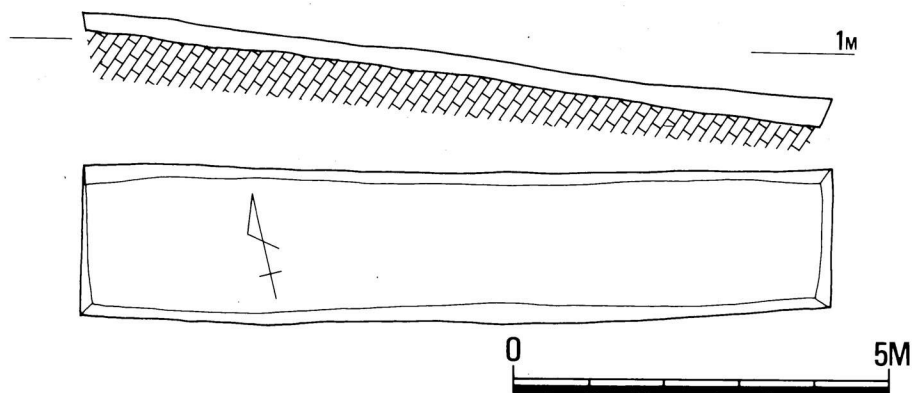
A-1トレンチはA区の中では最も低い位置にあり、調査前は土器の散布が多く見られた所である。トレンチは斜面に対して平行方向に幅2m、長さ8mの範囲に設定したが、遺構は何も無く、東へ向って傾斜する谷の自然斜面が検出されたにすぎない。土層の堆積は7層に分れるが、7層は自然堆積層であり従って出土遺物は3層までしか含まれていなかった。

出土遺物は主に須恵器で多少土師器、近世陶磁器も認められるが量は少く、しかも小片で図示したのは第5図の2つだけである。どちらも須恵器で1は杯身、2は高杯の脚部である。

A-5トレンチは摺峪4号墳の南約7mのところ斜面に対して直交するように設定した。トレンチは長さ10m、幅2mの範囲に掘ったが、耕作土の下はすぐに地山面となっており遺構は何も検出されなかった。また出土遺物は耕作土中に須恵器の小破片が10点余り含まれていたにすぎない。



第5図 A-1トレンチ、出土遺物実測図



第6図 A-5 トレンチ実測図

2. 摺峪4号墳の調査

調査前の状況

当遺跡の立地する丘陵斜面は牧草地で平坦にならした後に耕作をしているため確認調査を実施するまでその存在は全くわからなかった。また耕作もトラクターを用いる以前は今よりはやや盛り上ってはいたが石材の露出はみられず、古墳であるとは全く気づかなかったと話していた。付近には6世紀代の古墳も3基ほどあるが、いずれも墳丘又は石室の一部は残存しており外見上明らかに古墳とわかるものばかりである。

当古墳は摺峪古墳群中4基目の古墳であることから摺峪4号墳と命名する。

墳丘

石室入口部分を欠くが、周溝の残存状況から墳丘の直径を明らかにすることができた。それによると石室の長軸方向にやや長い楕円形状を示すが、残存する短軸方向の直径は約9mである。墳丘の盛土は全く残ってなく耕作土の下は地山土となっているため高さは不明である。検出時の残存状態ではわずか30cmをはかるのみである。

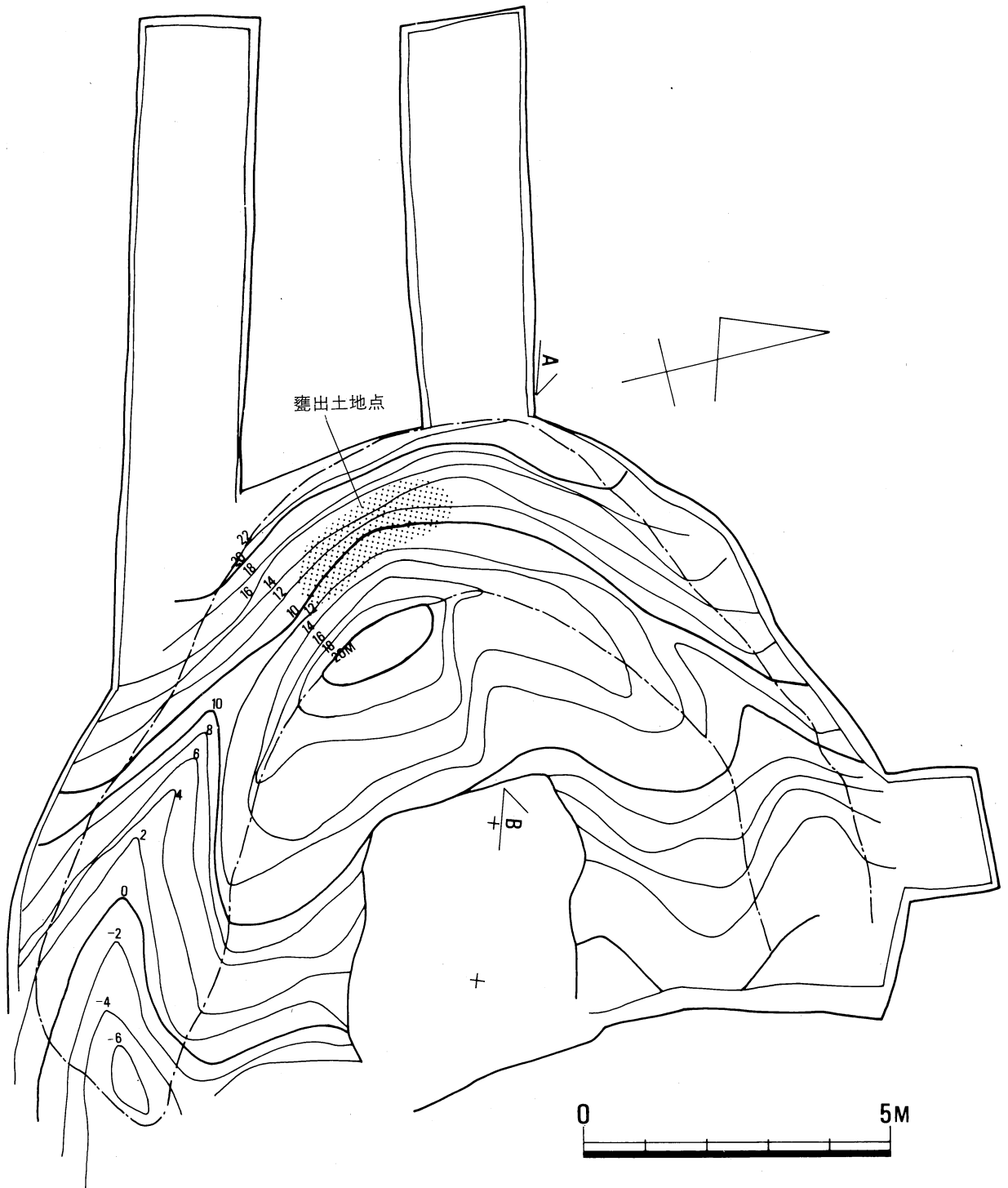
周溝

石室入口である東側は削平をうけて端部は不明であるが、他の部分は残存しており、全体の形状は石室の長軸方向にやや多い馬蹄形を示す。溝の中は最も狭い部分で1.45m、広い部分では2.8mをはかる。深さは墳丘の残存状態が悪いため明確にはしえないが、最も深くなる第7図A地点との差は約80cmである。周溝内の土層堆積状況は第8図に示すとおりである。

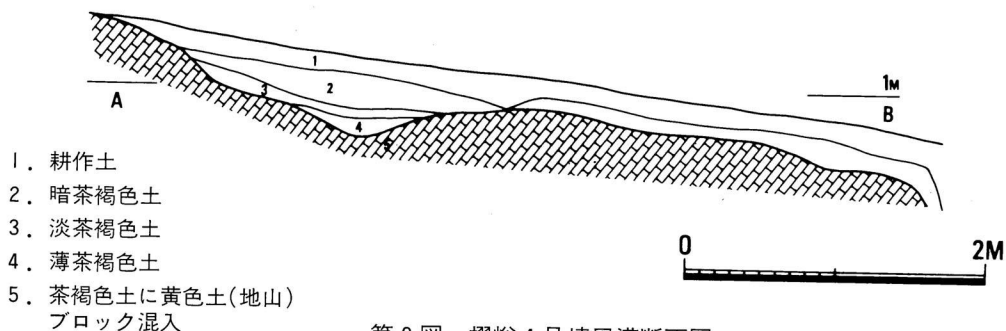
周溝内からの出土遺物は奥壁の西側付近から須恵器の甕が出土している。甕はほぼ1個体分あるが多数の小片に破砕された状態であった。甕の出土する層位は第8図第3層、第4層であり、周溝内に置かれていたものと考えられる。

埋葬施設

古墳は横穴式石室を内部主体とするが、石室の掘り方と基定部の一段目の石をいくつか残す



第7图 摺峪4号墳墳丘実測図



第8図 摺峪4号墳周溝断面図

のみの状態で検出された。石室の掘り方は長さ約 4.8m(残存長)、巾約 3.5mの長方形をし、石室は北側の側壁と奥壁を掘り方に寄せて構築してある。側壁と掘り方間の裏込め土は地山土である黄褐色土のブロックを含む暗茶褐色土で、恐らく掘り方の土を利用したものと考えられる。

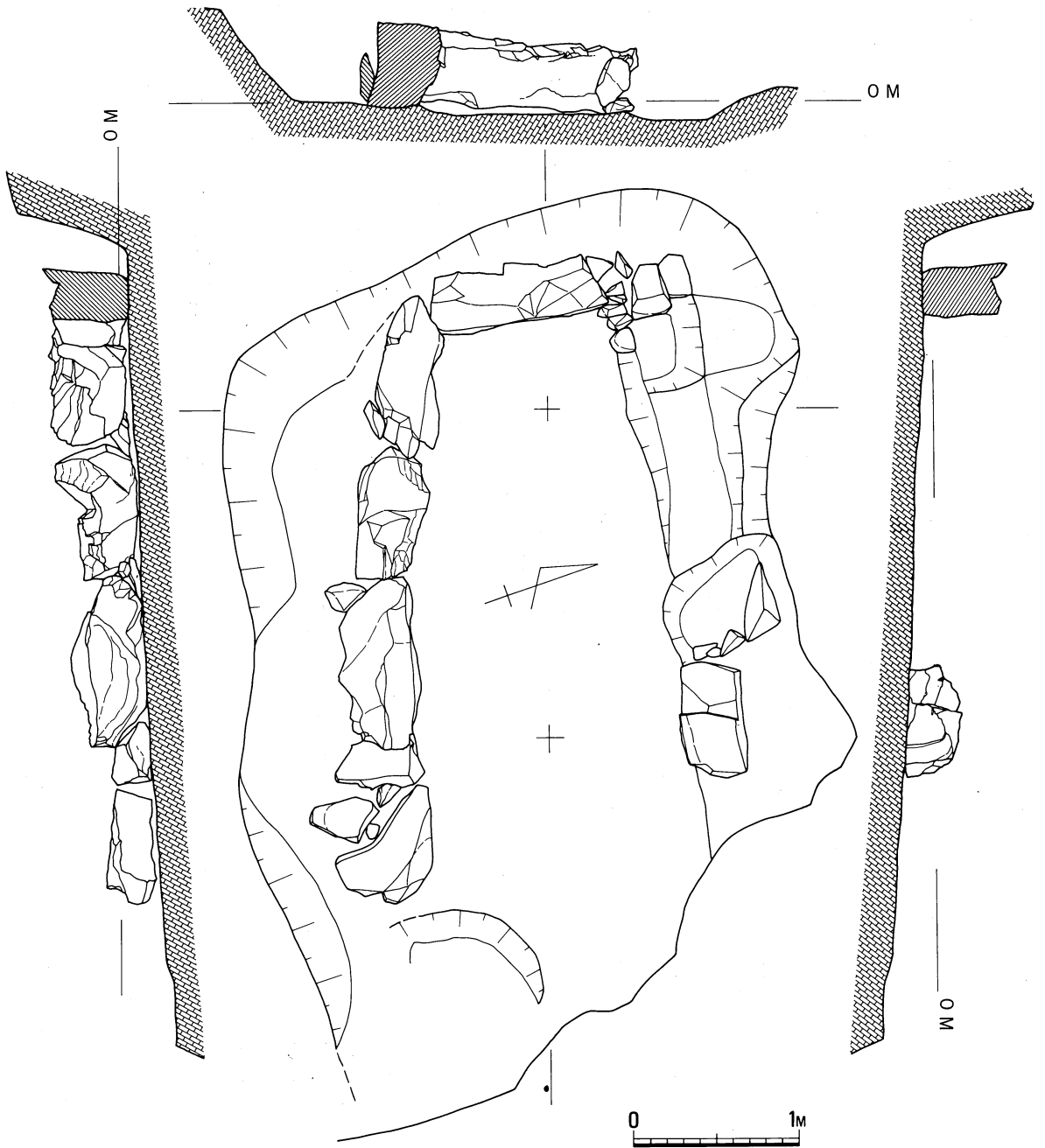
石室内の石材はすでに大部分が取り去られており、残存するのは玄室部分の奥壁と南側の側壁の基礎部と北側の側壁の1個である。羨導部分の石は全く残っていないが、石の抜き取った痕跡から石室は右片袖であったことがわかる。その規模は全長 4.4m(残存長)、玄室長3.54mで玄室幅は奥壁部 1 m、入口部 1.6mとやや入口に向って開いている。羨導部はごく一部しか残っていないが残存長はわずか 0.8mである。羨導幅は 1.1mである。

奥壁及び側壁の石積みは基礎部しかわからないが横口積である。石材は付近の山から産出される片岩系の石で薄く剥れやすい性質がみられる。

石室内の状況

石室の埋葬主体は木棺と考えられるが、釘と思われる鉄片は検出されていない。また石室床面には第10図に示すように玄室の中心付近に約 2 m×1 mの範囲に集中して副葬品が検出されている。奥壁寄りには玉類そして鉄鏃、大刀があり、入口寄りには土器類がかたまって置かれており、頭を奥に向けた状態で棺が置かれていたことがわかる。しかし、石室の破壊状態から考えてこれは原位置を止めているものばかりではないであろう。第10図9、10は入口に近い位置にあり、土器の特徴から他と比較して古い様相を呈しており前述した棺に伴うものではないと思われる。即ち、前述した棺は最終埋葬時のもので9、10は追葬の際に片付けられた残りであろう。

次に被葬者の数についてであるが床面出土の土器の特徴から少なくとも2時期に分れる。このことから2人は確認できるがそれ以上は不明である。石室の破壊状況からかなりの遺物が流出している可能性も十分考えられるが、現状では3人以上の被葬者を想定する手がかりは検出されていない。



第9图 摺峪4号墳石室実測図

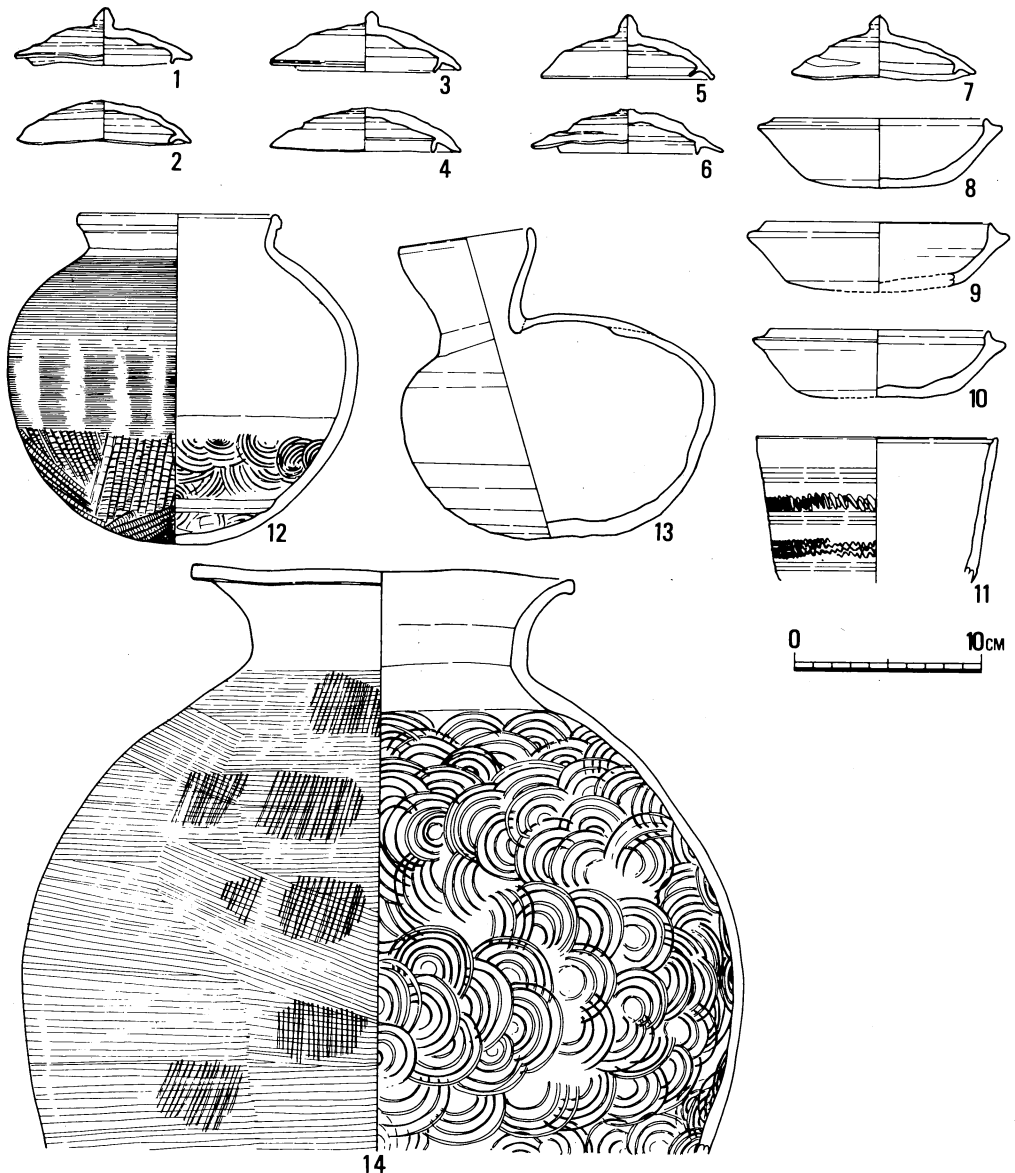


第10图 摺峪4号墳遺物出土状況図

出土遺物

(1) 須恵器

1～7は杯蓋であるが、2、4、6の3個体は宝珠つまみを欠いている。これは蓋であるにも拘らずつまみを欠いて杯身に転用したもので1と2、3と4、5と6は各々セットになった状態で出土した。7は他とやや離れて入口近くから出土しておりセットになる身は既に無い。7点とも調整は天井部の約々までへラケズリを施した後宝珠つまみを付し、内側面は横ナデによって仕上げている。また胎土も1mm以下の砂粒をやや多く含み、良好な焼成で灰色を呈す。



第11図 摺谷4号墳出土遺物実測図1

8～10は杯身である。3点とも完形品ではなくしかも玄室の入口寄りにあったもので追葬の際に片付けられたものと思われる。3点の焼成は不良で表面はかなり磨耗しており、調整はわからない。

11は破片のため明確な器形はわからない。残存する下端がやや内向しており壺のようなものが想定されるが断定はできない。外面には2条1組の凹線と波状文の文様が、内面には口縁端部に1条の凹線が施されている。1mm以下の砂粒をやや多く含む胎土で焼成は良好である。

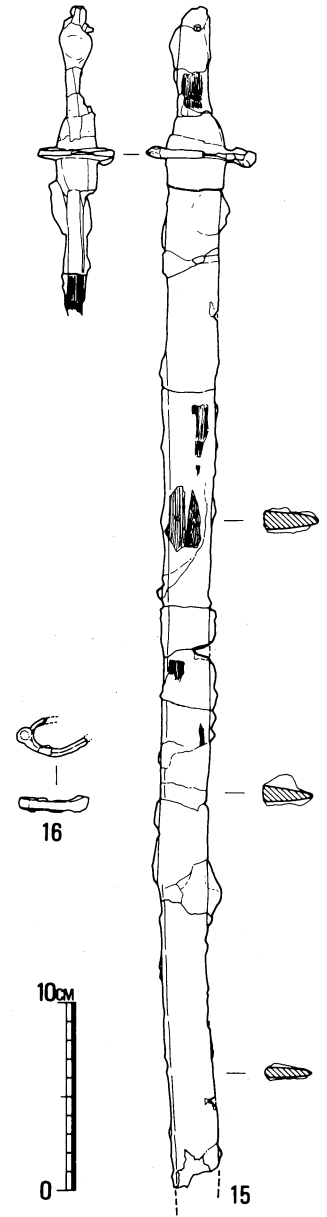
12は壺である。13の平瓶と並んで1～6の杯蓋よりもやや高い位置にあったもので石室を掘り出す時最初に発見した土器である。外面の上方きにはカキ目、下方きには平行方向の叩き目が施されている。内面は下方きまでは同じ円状の叩きを施しており上方きは横ナデにより調整している。胎土は2mm以下の長石粒をやや多く含むが緻密である。焼成も良好で灰色を呈す。

13は平瓶である。12と並んで出土したもので復元完形品である。体部下半はヘラケズリ、他は内外面とも横ナデによる調整が施されている。胎土は12の壺とよく似た2mm以下の長石粒をやや多く含む。焼成も同様に良好で青灰色を呈す。

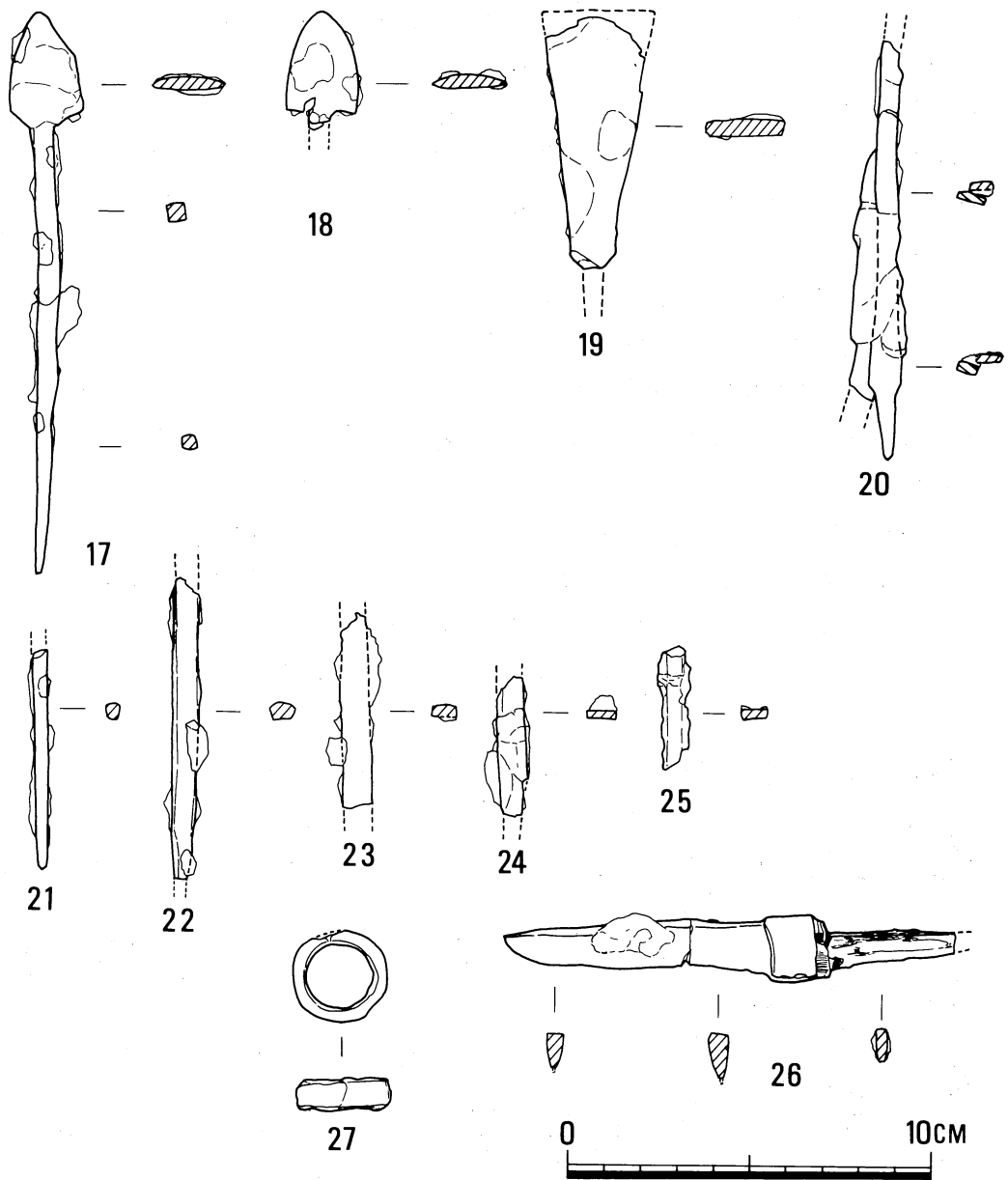
14は甕である。他は石室床面からの出土であるがこれのみ周溝内から出土した。奥壁の西側の最も深くなる部分からで、多数の薄片に破碎された状態であった。また破片は約5個体分ほどあったが、焼成不良のために内外面及び破面が相当磨耗しており、底部の復元はできなかった。外面は叩きを施した後カキ目により調整をしている。内面は同心円状の叩きを施し、口頸部は横ナデ調整である。胎土は1mm以下の砂粒を含み緻密である。

(2) 鉄 器

15は大刀である。玄室中央、奥寄りの位置に先端を入口に向けた状態で出土したもので、遺体の左脇に差していた様子が伺える。大刀は柄頭と刀身部先端を欠くもので残存長60.29cm、柄の残存長は7.9cmである。刀身は平造りで身巾2.5～2.7cmをはかる。身厚はいく分錆膨れしており現状で0.6～0.8cmである。



第12図 摺峪4号墳出土
遺物実測図2



第13図 摺谷4号墳出土遺物実測図3

柄は目釘の部分までは残存するが柄頭は残存しない。鞘は一部に木質痕が錆着する他は16の鞘金具が1点出土しただけである。鞘金具は巾 0.9cm、厚さ 0.2cmの鉄棒を楕円形状に曲げたもので一方の端には径0.5cmの小孔が穿たれている。鞘のどの部分に付くかはわからないが、中心付近と思われる。

17～25は鉄鏃である。17、18は三角形式のもので、17は完存しているが18は基部を欠く。19

はノミ頭式であるがこれも基部を欠く。20～25は基部しか残存してなく形式は不明である。

26は刀子である。茎の端部を欠くが大部分は残存しており残存長12.45cmをはかる。茎には木質の銹着が著しい。刀身は平造りで身長7.3cm、身巾1.18cm、身厚0.5cmをはかる。

27は大刀の柄部分の金具ではないかと推定するが断定はできない。外径2.55cm、内径1.8cmをはかるリング状の鉄器で巾1.88cm、厚さ0.25cmである。

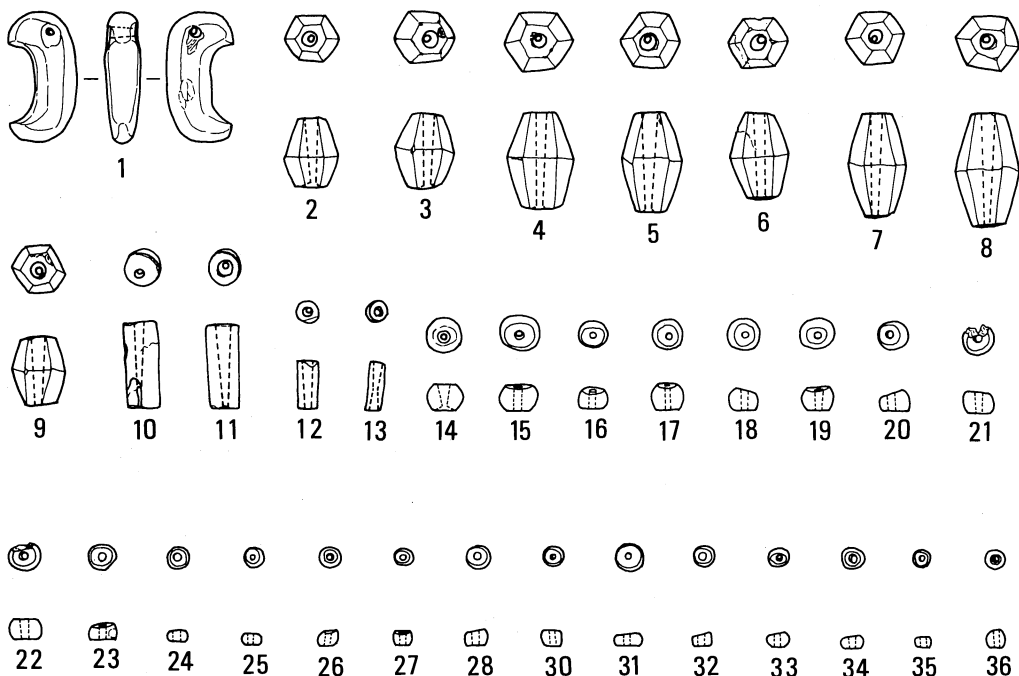
(3) 玉 類

1はメノウ製勾玉で白茶色を呈す。全長3.5cmをはかり多少の傷が認められる。穿孔の方法は一方から9分どおり穿った後他方からも穿つ方法を用いている。

2～9は切子玉である。全て水晶製で、大きさは最大長3.0cmのものから最小1.85cmのものまでがある。穿孔の方法は勾玉と同様に両面から穿っている。8、9は石室埋土内出土、他は石室内床面からの出土である。

10～13は管玉である。4点とも碧玉製で暗緑色を呈すが、13だけは緑白色を呈す。大きさは長さ2.2cm大のものと1.8cm大の大小2サイズに分れる。穿孔の方法は、10～12は一方からのみ穿っているが13だけは両方から穿っており真中が最も細くなっている。

14は水晶製丸玉である。穿孔の方法は勾玉、切子玉同様に両面から穿っている。



第14図 摺峪4号墳出土遺物実測図4

15～35はガラス玉である。高さ0.6～0.7cm、巾0.8～1.0cm大のものと高さ0.3～0.45cm、巾0.6～0.7cm大のものとの大小2サイズがある。小さいサイズのガラス玉は図示した以外にも3点出土しているが小破片の為、図示しえてない。色調は紺色～明紺色である。なお、19～22、33～35以外は全て石室内床面からの出土である。

古墳築造の時期

摺峪4号墳は石室がかなり破壊されていたため出土遺物の数量は少なかったが残存していた遺物から築造の時期を考えてみたい。

第11図に示した須恵器は2つの時期に大別できる。それは1～7までのものと8～10までのものであり、8～10の方が1～7よりも古い様相を呈する。8～10は平均口径11.6cm、器高3.7cmをはかる杯身で、内傾する短かい立ちあがりをも有する。その特徴から6世紀末の時期と考えられる。1～7は平均口径7.1cm、器高2.3cmをはかる杯蓋で、径約1cmの宝珠つまみを有し内面には短かいかえりがつく。その特徴から7世紀前半の時期と考えられる。このことから石室内に残存する遺物は古いものは6世紀末であり、新しいものは7世紀前半であると言える。従って摺峪4号墳の築造の時期は6世紀の末葉とするが多少の問題点が残る。第1点目は床面からではないが埋土中に6世紀後半にまで遡る杯の小片が入っていたことである。小片は1点でありしかも埋土中に入っていたことからすれば問題外とも言えなくはないが、石室の破壊状況から考えれば、築造の時期が6世紀後半にまで遡る可能性が全くないとも言えない。

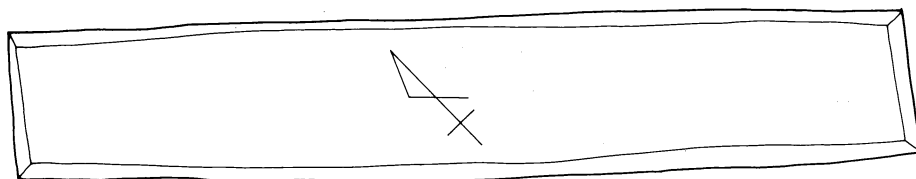
第2点目は羨道部分が残存しないため石室の規模が今一つ明確にできないが、袖を持つ石室であることから考えても築造は6世紀後半にまで遡っても不自然ではない。以上2つの疑問点が残るが床面からの出土遺物から判断して一応築造年代は6世紀末とする。そして最終埋葬は7世紀前半と考える。

3. B地区の調査

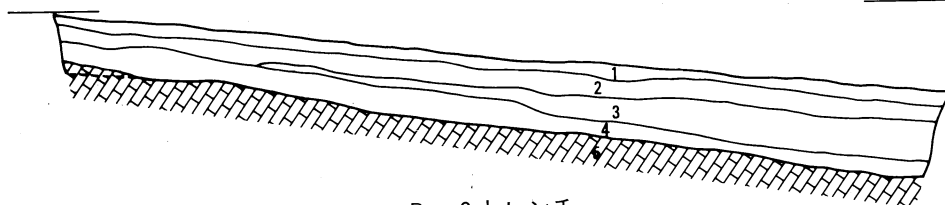
B地区はA地区の南約60mのところであり、A地区と同じ尾根の裾部に位置する牧草地である。牧草地は上と下とでは約5mの比高差がある傾斜面で、下方の道の近くに須恵器の散布が認められたため、トレンチはまず下方の中央に1本設けた。B-1トレンチがそれである。B-1トレンチは深さ1mまで掘り下げてやっと地山面に達したもので、可耕地にする際に盛土して造成したと考えられる。遺構は何も検出されなかったが、造成土中よりビニール袋半分程度の量の土器が出土している。大部分は須恵器片でわずかに近世陶磁器片、土師器片が混入する。それらは小破片ばかりであるが図示可能なもの◇点だけは第16図に示した。1～3は宝珠つまみを持ち内面にかえりを持たない杯蓋である。4～6は底部に対し直角に高台の付く杯身である。

B-2トレンチはB-1トレンチと並んでその上方に設けた。B-2トレンチの堆積土は上

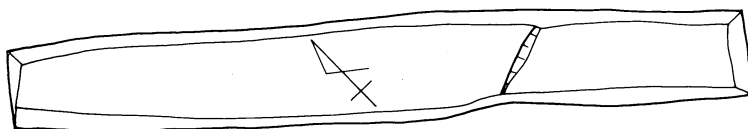
B-1トレンチ



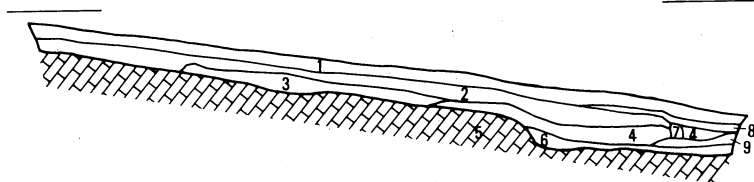
-1M



B-2トレンチ

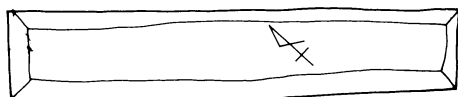
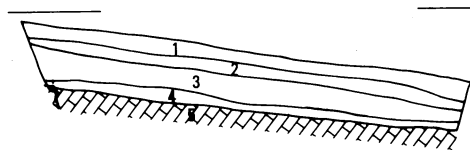


0M



B-3トレンチ

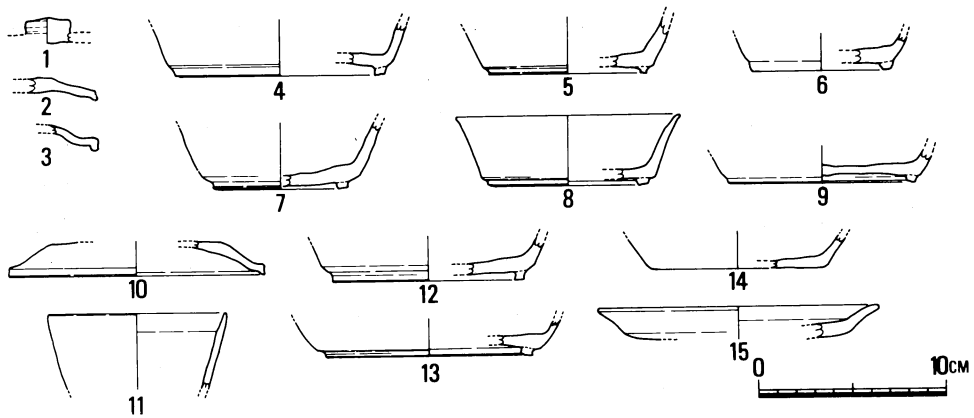
-1M



- 1. 耕作土
- 2. 淡茶褐色土
- 3. 暗茶褐色砂礫土
- 4. 黄褐色砂礫土
- 5. 黄色土 (地山)
- 6. 黒茶褐色砂礫土
- 7. 黄褐色砂礫土
- 8. 薄茶褐色土
- 9. 暗黄褐色砂礫土



第15図 B区トレンチ実測図



第16図 B区トレンチ内出土遺物実測図

方に向って徐々に薄くなっていき上端では耕作土の直下は地山面となる。地山面は上方から下方へ向って徐々に下っていくが約 $\frac{2}{3}$ 下ったところで段差がついて急に下る。段差は約 \diamond cmあり、遺構になるか否かの確認のためにB-2トレンチの隣3mの位置にB-3トレンチを設けた。B-2トレンチの造成土内からの出土遺物は少くビニール袋に $\frac{1}{2}$ 杯程度である。B-1トレンチ同様主に須恵器片が出土しており図示可能な小片については第16図7~9に示した。

B-3トレンチはB-2トレンチの谷側に平行方向に設定した。地山面までは0.8mをはかるが遺構は何も検出されなかった。またB-2トレンチからの段の続きは何も検出されなかった。

出土遺物は第16図10~15に示した。B-1、B-2トレンチと同一時期と思われるもので、その特徴から奈良時代と考える。

IV ま と め

1. 摺峪4号墳について

摺峪4号墳は6世紀末に築造され、7世紀前半まで追葬の行われた古墳である。石室はかなり破壊されており検出した遺物は少く、内容も質素である。

さて、当古墳の位置する摺峪谷には他にも同様の横穴式石室を内部主体とする円墳が3基あり、摺峪古墳群を構成する。また本流である西河内川の上流には横穴式石室を内部主体とする円墳3基から構成される三谷古墳群が存在する。西河内川流域は他には中流域左岸に数基と右岸下流域に横部古墳群が存在する程度で少い。従って摺峪4号墳はこの西河内川流域の最奥に位置し、中流域を見渡す高所にある。あたかも西河内川上、中流域に開けた水田を眼下にした奥津城といった状況である。

摺峪古墳群、三谷古墳群とも本古墳以外に発掘調査を実施したものは無く、時期、規模等摺峪4号墳と比較する資料に欠けるが現状でわかる範囲でみる。まず摺峪2号墳は墳丘の盛土は全く無く石室が露出している。入口側は若干削去されているが現存長は7.75mを測り、天井石は4個並んでおり摺峪4号墳より規模は大きい。摺峪1、3号墳については外見からは詳しくはわからないが当古墳と比べて大差は認められない。三谷古墳群も時期、規模についてはわからないが相異は無いと思われる。このことから摺峪古墳群、三谷古墳群は6世紀後半～7世紀代に築造、埋葬されたものと考えられる。この中でも特に摺峪2号墳は規模も大きく抜き出ている。それに対し摺峪4号墳は右片袖式の石室を有するとは言え墳丘の規模も小さく、また副葬品の貧弱さからも摺峪4号墳は西河内の上、中流域において農業生産を生活の基盤とする有力家族の墓と考えるが首長層となるような権力はなかったと思われる。

2. 西河内上遺跡について

西河内上遺跡からは6世紀末に築造された古墳が1基検出された。残念ながら古墳以外の遺構は検出されなかったが遺物は比較的多く出土しており特にB区からは須恵器片が出土した。またB区からは1点だけであるが黒曜石の石鏃がみついている。A区からはわずかだが弥生式土器片もみつかり、摺峪谷には遅くとも縄文時代には先人の足跡が刻まれたことがわかった。

さて、B区包含層中より出土した須恵器は大部分が小破片であり、またトレンチ内からは遺構がみつかってないため他からの流入であるが、それらはある一時期に集中している。しかも付載したズリ窯跡採取須恵器、さらに橋谷窯跡(注1)採取の須恵器と同一時期と考えられるものである。このことから考えると地形的にみて周辺に住居址の存在は考え難く、B区出土の須恵器は窯址出土の可能性が出てくる。しかし、B区と橋谷窯跡、ズリ窯跡は須恵器が流出する

には距離がやや開きすぎており、調査区域外に別の窯跡が存在する可能性が強い。

岡山県下で須恵器窯跡の発掘調査が行われたものの中には寒風古窯址群(注2)、黒土・寒田窯址(注3)などがある。前者は古墳時代末から白鳳時代にわたり操業されており、後者は7世紀初めから前半における一時期に操業されている。B区出土の須恵器を比較してみると、寒風古窯址群のC類(注4)よりはやや新しい様相を呈しておりその特徴から大まかにみて奈良時代のものであると思われる。この時期の西河内地区には旦原遺跡(注5)から火葬墓が出土しており、新しい価値観をもって律令社会に組み込まれた人物が既に存在していたことがわかっている。また摺峪谷の奥、神ノ毛嶮を越えると直線にして約3kmのところに真鳴郡衙推定地である福田A遺跡、高屋B遺跡(注6)があり、両遺跡からは奈良時代の掘立柱建物と須恵器が出土している。従って摺峪谷地域は当時真鳴郡内における主要須恵器生産地であったのではないだろうか。しかし、このことについては同時期の遺跡出土須恵器の胎土分析を行ったわけではなく結論は今後の課題としたい。

注1 落合町遺跡地図No.227 今回の調査中にも何片か採集したが、図示不可能な小片ばかりである。

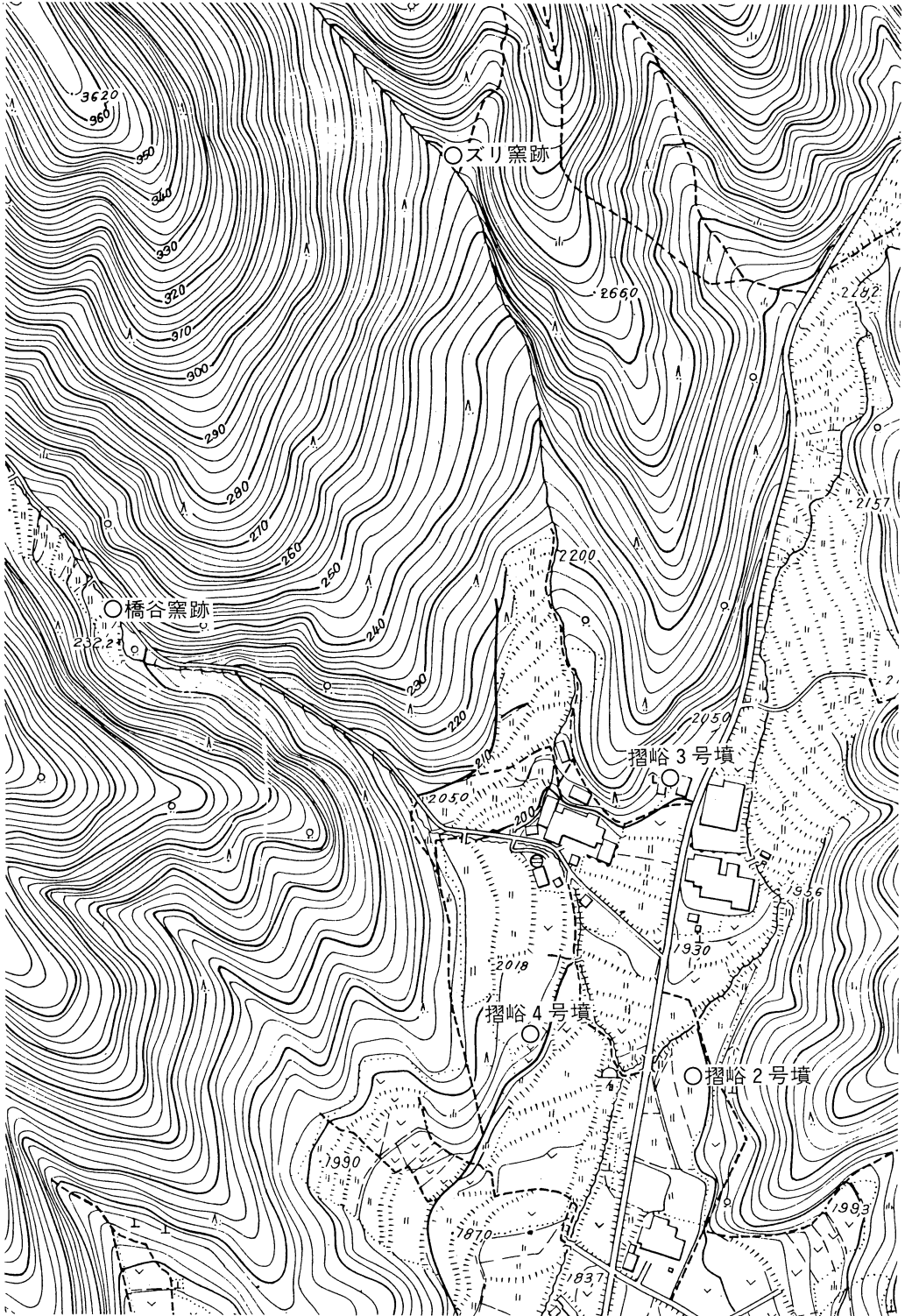
注2 岡山県教育委員会『寒風古窯址群』「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告」27. 1978

注3 岡山県教育委員会『黒土窯址・寒田窯址』「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告」31. 1979

注4 注2の報告以外に以前からの採集遺物で西川宏氏が編年を行っており、西川編年ではC類は寒風3式(白鳳時代)とされている。

注5 岡山県教育委員会『旦原遺跡』「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告」11. 1976

注6 落合町教育委員会「福田A遺跡・高屋B遺跡」1983



第17図 ズリ窯跡周辺地形図 (1/3000)

V 付載 ズリ窯跡

1. はじめに

ズリ窯跡は落合町大字西河内字摺峪ズリ1545-2番地に所在する須恵器の窯跡で西河内上遺跡の北方約400mのところにある。遺跡は桧の植林地の中にあり、昭和59年に山林の所有者が林道を敷設した際土器片が多数散布しているのを発見したものである。落合町教育委員会は西河内上遺跡の発掘調査期間中に連絡をうけ、現地へ行った。その時に採取した遺物をここに掲載する。

2. 立地

ズリ窯跡は標高260mの植林地内にあり、一番近い民家より比高差60m余の山林斜面に立地する。斜面下方には約5mの範囲に平坦面がみられ、須恵器が散布していた。須恵器の間には窯壁片と思われる焼土がかなり混入していたが、窯本体の露出は認められなかった。恐らく平坦面上方の斜面と推定されるが現状では確認できていないので、採取してきた遺物についてのみ述べる。

3. 遺物

採取した遺物は整理箱に2箱程度であるが、大部分は小片で破碎されており、ここに載せたものは実測可能なものわずか32点である。

1~12は蓋で、いずれも内面にかえりを持たないタイプである。うち1~4は押し潰された扁平な宝珠つまみを持つ。他は残存しないため明確にはしえないが大部分は同様の宝珠つまみを有すると考えられる。口径の大きさは14.1cm~19.1cmまでとバラつきがみられるが、平均16.3cmである。器高は1を除いて他は扁平である。

胎土は0.5mm大の長石、石英粒をやや多く含む。

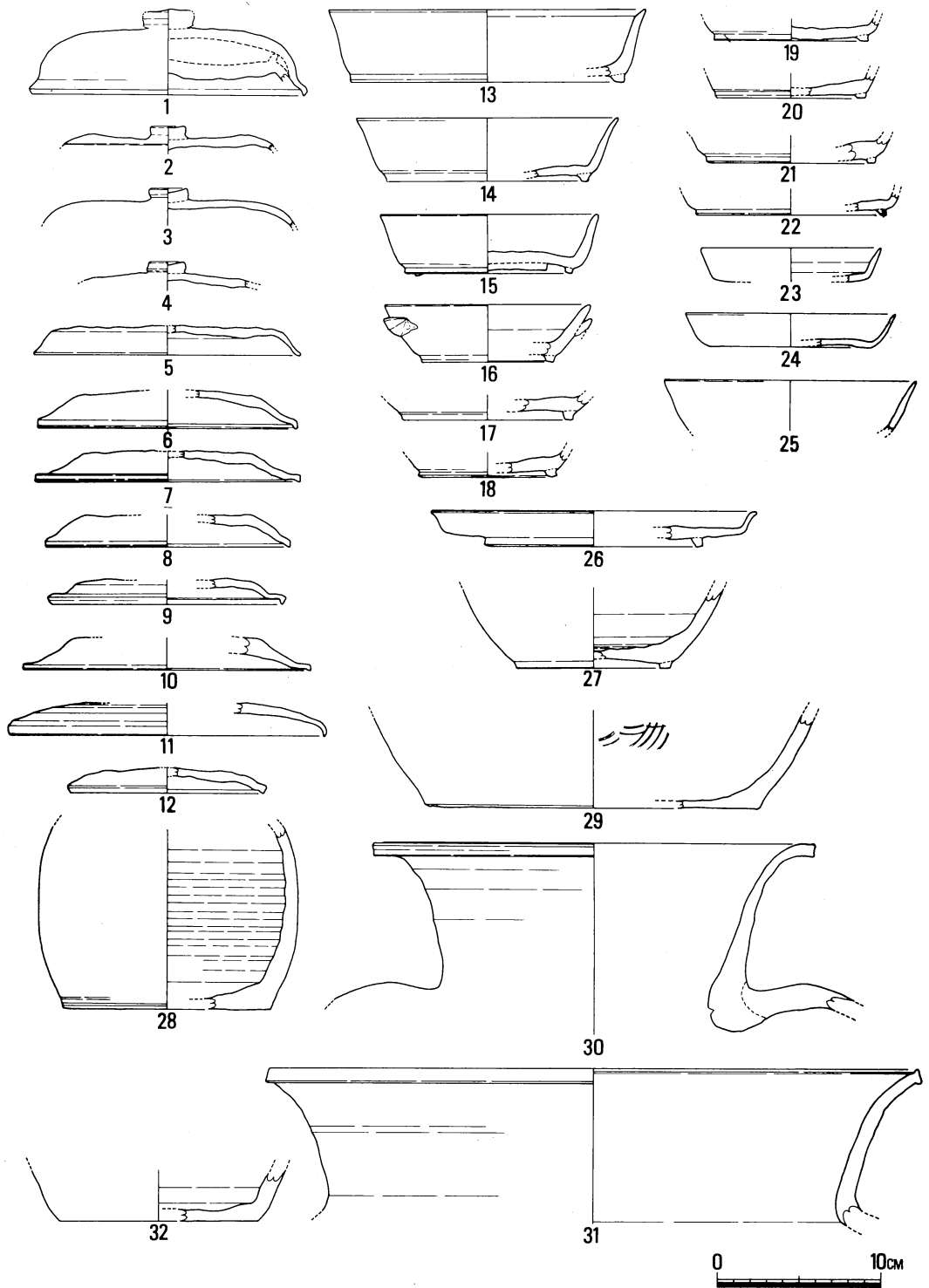
13~25は杯身である。器形は高台が付くもの(13~22)と付かないもの(23、24)とがある。さらに高台の付くものは体部があまり開かないもの(13~15、19~22)と椀状に大きく開くもの(16~18)に分れる。高台の付かないタイプは体部があまり開かない。口径は10.9cm~19.3cmまであり大小差がある。

26は盤である。口縁端部は外方につまみ出されたような形状を呈す。

27、28は壺である。27は高台が付く。口縁は採集してなくその形状は不明である。

29~31は甕である。29、31は底部付近の、30、31は口縁部分の破片である。口縁はゆるく外反しながら開くラップ状を呈し、端部は平坦面をもって収める。肩部はいかり肩状に張る。体部内面は同心円状の、外面には平行の叩き目が認められる。図示したものではわずか29の内面に認められるだけであるが、図示した以外に甕の体部の破片が出土している。

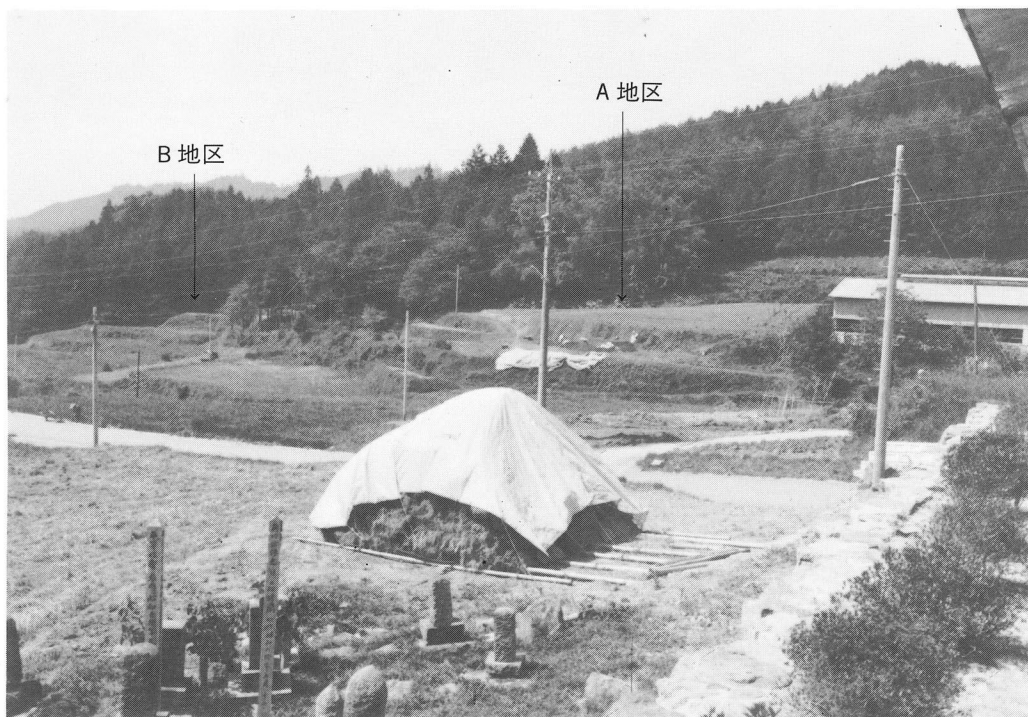
ズリ窯跡採集の遺物の時期はその特徴から奈良時代と考えられる。



第18図 ズリ窯跡 採取遺物実測図



1. 西河内上遺跡遠景



2. 西河内上遺跡 近景



1. A-1トレンチ



2. A-5トレンチ



1. A-2 トレンチ内 古墳周溝検出状況



2. A-3 トレンチ 周溝、石室検出状況



1. 摺峪4号墳 石室内遺物検出状況



2. 摺峪4号墳 石室検出状況 (奥壁より)



1 摺峪 4 号墳 玉類検出状況



2. 摺峪 4 号墳 石室発掘状況



1. 摺峪4号墳全景（東より）



2. 摺峪4号墳全景（西より）



1. 摺峪 4 号墳周溝土層断面



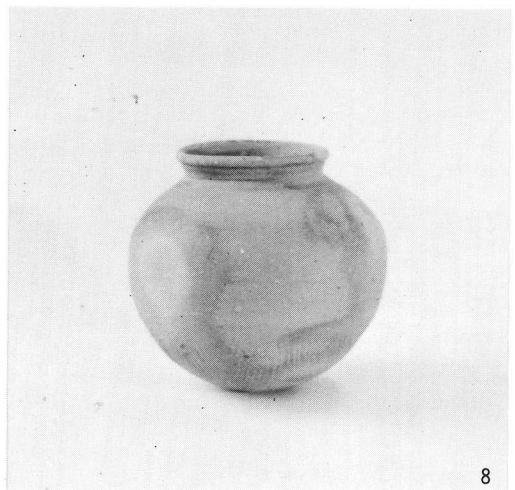
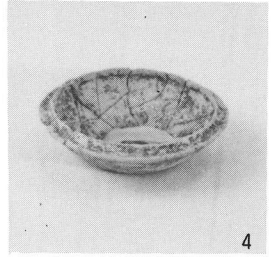
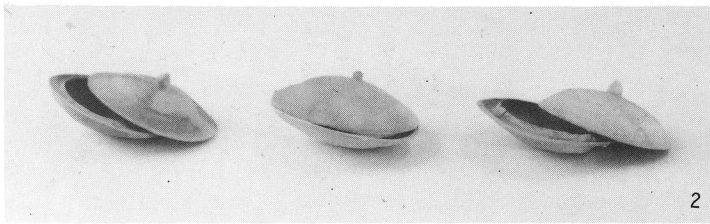
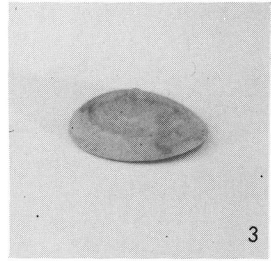
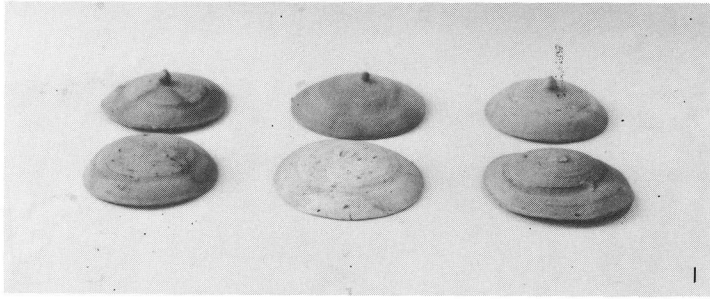
2. 摺峪 4 号墳 周溝内遺物出土狀況



1. B-1 トレンチ

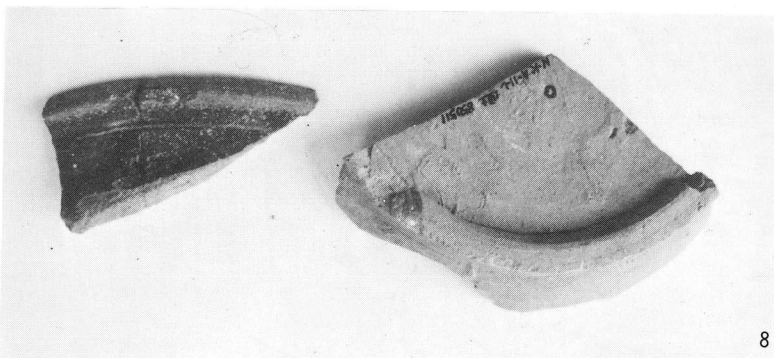
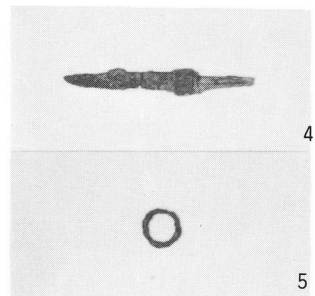
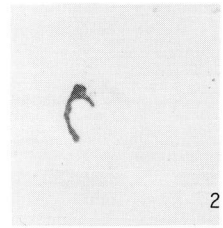
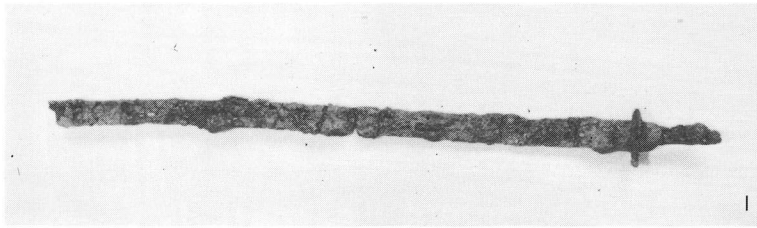


2. B-2 トレンチ



1 ~ 8. 摺峪 4 号墳出土遺物 (2 は 1 の土器の使用状況)

図版10



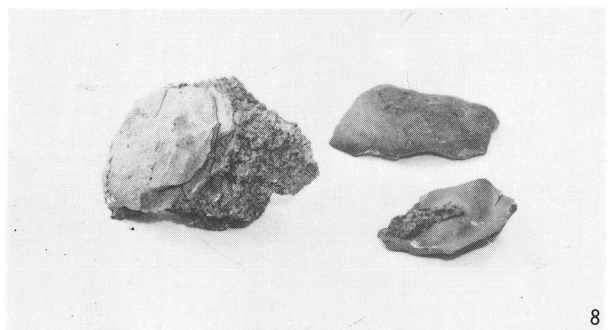
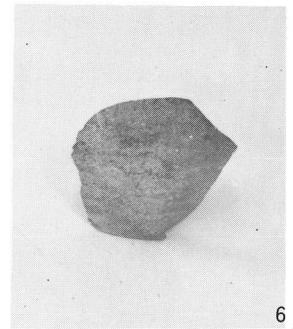
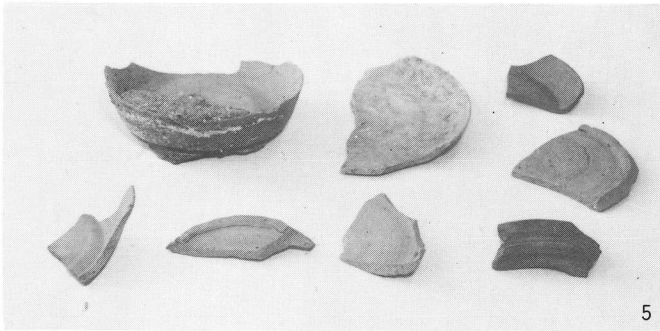
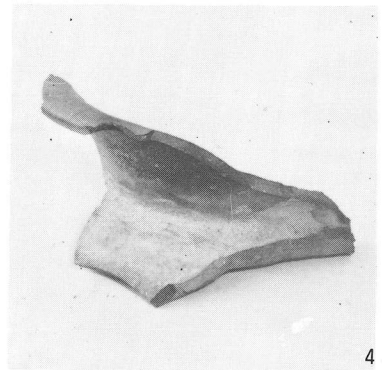
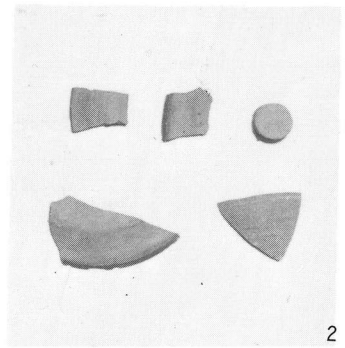
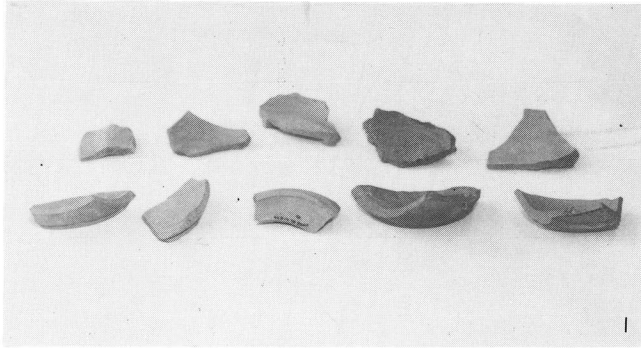
1～7. 摺谷4号墳出土遺物 8. A-1トレンチ出土遺物



1. ズリ窯跡近景



2. ズリ窯跡



1. B-2、3トレンチ出土遺物
3~8. ズリ窯跡表採遺物

2. B-1トレンチ出土遺物

落合町埋蔵文化財発掘調査報告

西河内上遺跡

1986年3月25日 印刷

1986年3月31日 発行

編集
発行

落合町教育委員会

岡山県真庭郡落合町垂水618